

学問・科学と大学の教科の関連について

大学での教科に対する学生の意識改革 を企図した特別授業に関する報告

元林 義昌

WHY WE HAVE TO LEARN SCIENCES IN COLLEGE EDUCATION

MOTOBAYASHI Yoshimasa

(キーワード)	(Key words)
学問	Studies Learning Knowledge
近代国家	Modern state Nation state
工業化世界	Industrialized world
科学	Science
自然科学	Natural science
社会科学	Social science
研究の枠組 研究の手法	Discipline
大学教育	College education
教科	Subjects of the Course
教養主義	Knowledges fortified by culture
学術論文	Treatise Scientific research
卒業論文 学位論文	Thesis

1. 報告の主旨

本稿の論述は、本学において担当した2年生と3年生向けの講義科目の全てにおいて、その開講頭初の3回にわたり試みた学問・科学・大学の教科間の関連についての意識改革

を企図した授業の内容および企図した効果や成果に関する報告である。

従来、どこの大学においても見られなかった、この種の授業を敢えて複数の開設科目の授業の中で時間を割いて行い、できるだけ多くの学生に高等教育の主旨を認識、会得させ

ることを必要と考えるに至った背景と動機は、学生の多くに共通して見られる大学での勉学に当たったのある種の戸惑いと混乱、その結果として生まれる無駄な努力を解消することにあった。この試み（以下、特別授業と呼ぶ）の性格をひとことで表現すると、「大学での教育のうち実技科目ではない教科に共通する高等教育の基本的な性格についての解説」となるであろう。

この特別授業は、演習科目と卒業研究指導とを除き、担当した全ての科目に共通した内容のものとして準備されている。そこでは個々の科目内容の説明とは別個に、特別に準備した「第2節 学問と科学（学術研究の基本的な性格）」と題した講義要録を配布し、これに沿った内容の講義を行ってみた。この講義は学生の意識改革を主眼にしていることから、教場では特にその重要箇所を中心に個々の学生への質疑応答の対話によるブレーン・ストーミングをその理解の確認を行いながら進めることに留意した。このために学生に対しては、あらかじめ教員紹介や各科目内容の解説にも掲げたおいた“モットーとして、教場では知的に緊張した時空間を保つこと”を実践すると宣言し、時宜に応じかなり挑発的で攻撃的な問いかけを試みている。

2．特別授業の内容

この特別授業において学生に配布した講義内容の要録は、本稿の末尾に資料として掲げてある。そこで取り扱っている分野はかなり多岐に及んでおり、またその内容はかなり専門的なものも含まれている。以下、ここで指摘した7つの要目を講義での論旨の流れに沿って示す。

- ① 大学の教員に求められている役割と資質：
 - ・ まず研究者であると同時に教育者でもある

- ・ 彼等に同じテーマの説明を求めても、その視点や解明の手法は多様、個性的であってそこから得られる結論も異なるものとなることが多い
- ② 大学の教科の基本的な性格
 - ・ 大学側が便宜的に設定したもので、学問分野そのものではない
 - ・ 入門としての学問を教えているのではない
 - ・ 個々の学問研究の手法や特色、その発展の流れや最先端の現況について言及している
- ③ 大学ではヨ - ロッパ起源の学問を教えている
 - ・ 外界に適応して楽しく有利に生きてゆくためには、その仕組みを知ることが重要
 - ・ 現代世界はヨ - ロッパ起源の科学技術の上に築かれた工業化社会に支えられている
 - ・ よって、現代社会に適応して生活するためには科学技術や学問研究の性格についての知識が不可欠
- ④ ヨ - ロッパ起源の科学技術
 - ・ その基本的な性格、特色
 - ・ 科学の発達史の概略
- ⑤ 自然科学と社会科学の手法の違い
- ⑥ 情報の基本的な性格と対応のノウハウ
- ⑦ 学術論文は、人類の知識の集積に寄与するための知見についての試みとその結果の報告である

3．学生の反応と感想

この試みの成果や効果は、特別授業を受けた学生に中間レポートの形で提出させた感想やから読み取れた。そこに提示された学生の感想は総じて、“この特別授業を受けて初めて大学での学習の意義や対応の仕方が明解になった”とするものと“もっと早く1年生のと

きにこの内容の授業を受けたかった”との2つの内容であった。また、特別授業の中での学生の応答が次第に活気を帯びるようになったのであった。

これらのことからみても、企図した目的の成果は、学生の資質により差がみられたものの、かなりあったと見てよいだろう。少なくとも彼等の意識の面において、大学教育の本質や教育システムの実態面での全体像について説明が受けられたことへの満足感と安堵感にはあったと考えている。

このことを物語る具体例として、平成10年度にこの特別授業を受けた学生の間接レポートに記された感想文をここに紹介する。

(課題1)：講義の中での「第2節 学問と科学」部分に関連して、この種の学問全般の性格に関連した講義を行うことについての注文やコメント

(コメント例1)

私は講義の中で一番印象に残り感銘を受けたのは、何事にも原因があり結果があるということで、(例に出された)モップダンスの話から、賢さというのは(起きている事柄の)仕掛けを知っていることだということです。これは(ヨ・ロッパの)学問においてもそうだとおもいますが、日常生活の中においてもこの考えは生きています、と感じました。

今までは何かの分野について学んでいましたが、その学ぶ学問ということについて考えるという視点があり、それはなぜかむずかしいと感じましたが、学問にも歴史があるという考えが加わり、学問について学習したことを楽しく感じました。

また、哲学と科学とは全く異なる分野の

学問だと思っていたのに、哲学の後に科学ができたというのは驚きでした。沢山の学問があるけれども、全ての学問はなんらかの接点をもって存在するのだ、と知りました。

情報の基本的な性格の講義も、情報化社会のこの時代に情報(の質)を見極めなければならぬというのは全くその通りであり、情報の真偽を考え偏りなく情報に対して(/を基にして)冷静に判断できるようになりたいと思いました。

今まで考えるということは難しいと感じていましたが、この講義で考えるのは楽しいと久しぶりに感じました。

<中村奈緒 国際社会学科3年生>

(コメント例2)

「学問」にしても「科学」にしてもその言葉は知っていてもその性格までは知らず、そのことについて教えて下さる先生もいなかったもので、この講義を行ってよかったですと思います。また理想としては、私はもっと早い時期(1、2年次)の時にこの講義を聞けたら良かったと思いました。今回、聴けただけでもためになったけれどももっと早くこの講義をきいていけば、もっと違う形で視野が広がったと思います。私は特論Cも取っていてこれと同じ講義を1・2年生と一緒に聴いて、1・2年生は得だと思いました。

この講義で、なぜ人間社会は工業化社会にしがみついているのか、という問題について、(それは)便利で快適(/+豊さをもたらすから)であると言う答えに、当り前に生活しているので答えが見えてこない、疑問を持ってその答えを捜してゆくというむずかしさを理解しました。また疑問を持つことは大切で(このことでものの)見方がだいぶ違ってくると思いました。

特論Cの講義で我が学校の学問について話をして下さったのは大変よかったと思いました。(この)学校に入ってきてから学校の学問がどのようなことを問題にしているのかということを知るといのは大分遅いと思いました。よく学外の人に、どのようなことを貴方の学校ではしているの、と聞かれたときに明確な答えができずに困ることが何回もあり、その答えについて教えて下さる先生もいっしょになかったので、今回の講義でそれがきけて大変良かったです。またいろいろな豆知識が増えて良い講義だと思いました。

<加藤展子 国際社会学科3年生>

4. 実験を通して得られたこと

結論として、この特別授業の実験を通して得られた大学教育に対する学生の側からの認識の現状に関わって得られた知見とそれらへの対応への私見を以下にまとめる。

- ① 学生の戸惑いと混乱に関連して共通してみられる傾向
 - ・ 大学での教育をこれまでの高校までの同質の延長上にあるとした漠然とした認識

- ・ 大学教育では、実技科目と高等教育科目と云う二つの目的や対応が質的に異なる教科群があることに気付かない
 - ・ 高等教育科目では、技能訓練の科目は別として、知識よりも思考能力、外界への対応能力が重視されることの認識が欠落している
- ② これら学生の戸惑いと混乱は、我が国の学生に見られる大学での学習に際しての目的意識や意欲の欠如の一因となっている可能性がある
 - ③ 重要なことは、これらの弊害が個々の学生の資質とは無関係に、彼等が学生の大学での学習態度や方法に関する基素知識の不足に由来していることである。したがって、この弊害は、勉学の意欲や心構えを強調する単なる精神主義による意識改革によって除去できるものではない
 - ④ この様な学生側の無知と誤解は特に近年、問題とされるている高校での履修内容のレベル引き下げに伴う入学者の基礎学力の異常な低下とは全く次元の異なるもうひとつの重要な問題と考えるべきである

(完)

付属資料

(汎用) / 2 - N

第2節 学問と科学（学術研究の基本的な性格）

1 学問とその発展の歴史

A 学問について

- * 東洋の学問は、専ら人が生きてゆく上での知恵を学ぶことを目的としてきた
- * 西洋の学問の関心は、人の外界についての知識の整理と、そこに見出される事象（ことがら）に法則性を見いだすことにあった
- * やがてそれは、知識を得ることを目的とし、かつこれを系統的に整理することをはっきりと意識しながら計画的に行う知的な認識活動（科学）に発展する

B 哲学から分立した諸学問

- * 西欧の学問は古代ギリシャ哲学にその源流を見る
その後、そこから多くの個別の対象領域を持つ科学が生まれた
- * 現在、哲学は"自己を含めた世界全体の性格に関する学問"とされている現在の哲学の三つの目的と性格については「D項」参照
- * 科学の定義：外界を経験的にまた客観的に考察・研究し、得られた知識を固有の知識体系に築き上げることで、そこにある一般の法則を解明しようとする、高度に理論性を重視する学問
- * 科学はその後、研究対象を自然界の事物から人間界に拡大する
 - ① 社会科学系の諸学問（Social Sciences）
様々のレベルの人間集団の構造、相互の係わり合い対象とする
具体的には、政治、経済、社会に関する学問
 - ② 人文系の諸学問（Human Sciences）
人間に固有の歴史、文化現象を対象とする
具体的には、言語、文芸、歴史に関する学問
- * 社会科学系の学問や、人文系の学問では、対象が一回性の現象かつ価値に係わる現象であることから、対象の個別性・歴史性が重視される

このようなことから、純粋に自然科学と同じ研究方法は不可能

C 西欧の学問 / 科学発展の歴史

① ギリシャ哲学の世界

- ・ Philosophy : 紀元前 5 世紀 ~ 4 世紀にアテネを中心に始められた自然界の原理 (後には認識や倫理など人間社会の問題も含めて) に関する学問
- ・ それは、ローマに引き継がれ多くの改良と精緻化されるようになった活躍した人々 : Pythagoras Platon Aristoteles Eukledius
- ・ 西ローマ帝国の滅亡 (457) 帝国内に蓄積されていた文献類は、散逸し学問伝統は途絶、わずか東ローマ帝国に残されるに至った

② 教父の時代

キリスト教がローマ帝国で国教とされた (392) キリスト教とギリシャ・ローマ哲学との融合の試みが見られた ギリシャ・ローマ哲学の変質 ヨ - ロッパ世界の学問はキリスト教の世界観の下で停滞

③ グレコ・ロマーノ・アラビック時代

- ・ 7 世紀にヨ - ロッパ周辺に登場したイスラム世界は、熱心にギリシャ・ローマ学問を採り入れ、さらに彼等独自の新しい学問成果を付け加えた
- ・ この結果、東ローマ帝国とイスラム世界では、古代学問の世界が 14 世紀まで継承されてきた

④ 12 世紀ルネッサンス / スコラ (哲) 学

- ・ イスラムの刺激を受けたキリスト教的なスコラ哲学が誕生するそれは、世界の全ての事象をキリスト教の神の摂理として理解する立場
- ・ ボローニャ、パリ、オックスフォード、ケンブリッジなどの諸都市に大学が設置され、ヨ - ロッパで本格的な学問が始まる
そこでは「哲学 (自由 7 科目と訳される)」を学ぶのが主体だった
言葉に係わる三科目 論理学 修辞学 文法
自然に係わる四科目 天文 算術 幾何学 楽

⑤ 16 ~ 17 世紀のルネッサンス

16 世紀に入るとスコラ哲学とは異なる多くの世界観の提案や発見が登場する

背景には15世紀後半から異端的な思想が怒涛の如く流入していた事情

(一般によく知られている学者)

Copernicus, Nicolaus 1473 ~ 1543

プトレマイオス以来の天動説を否定 思想史に転機をもたらした

Kepler, Johannes 1571 ~ 1630

惑星の楕円軌道と運行に関する法則の発見

万物は魂をもつとする新プラトン主義的傾向 占星術にも凝っていた

Bacon, Francis 1561 ~ 1636

スコラ哲学の方法からの脱却の理論 唯物論の祖方法として、感覚、実験、自然法則の発見、自然の征服を主張

Galilei, Galileo 1564 ~ 1642

ピサ、パドヴァ大学の教授 フィレンツェ宮廷付き数学者

落体法則の発見 天体望遠鏡の発明 木星の衛星の発見

中世を支配したスコラ的なアリストテレス盲従をしりぞけ、感覚、観察、実験に基づく新しい科学的な方法を確立

コペルニクスの地動説を支持して宗教裁判にかけられた

(この他にも活躍した人々)

Paracelsus, Aureolus Theophrastus 1493 ~ 1541

スイスの医学者 化学者

いまだ中世的な観念をもちながら、当時の文献的な知識に反抗

自然そのものに知識の源泉を求めようとした

全宇宙をひとつの有機体とする自然観

Bruno, Giordano 1548 ~ 1600

自然哲学者 コペルニクスの地動説に基づいて宇宙の等質均等を確信

一切の事物は神の現れ(汎神論)

教会の迫害を受けて放浪 捕らえられて火刑になる

(17世紀になると)

Newton, Isaac 1643 ~ 1727

運動の三法則 光学理論 微積分法の発見 古典力学 古典物理学

そんな彼も“空間は神の身体である”と云っている(理神論)

Descartes, René 1596 ~ 1650

数学 哲学 解析幾何学

新たな学問の方法論、直感と演繹による提唱

精神と物体と互いに独立の二実体とする二元論の立場の主張

心身関係の説明が困難

道徳思想では人間の自由意思を尊重 世界の機械的必然論と矛盾

- * 科学革命論（20世紀前半に提案された説 現在の常識）：ヨ - ロッパ独自の「近代科学」の起源は、旧来のギリシャ・ローマやイスラムの理論より抜け出した16～17世紀に遡る
- * この歴史観に対する疑念：この時代に活躍したこれら学者達の学問の態度は、現在の科学者たちのそれとは同質ではない
 - ・ この時代には12世紀ルネッサンスの伝統（神の節理を求めようとの努力）が色濃く残っていた
 - ・ 科学者という職業も意識も言葉もなかった < 村上陽一郎 >

⑥ 18世紀の啓蒙主義

- ・ 精神と学問の世界でキリスト教を捨てる試み（学問上の聖俗革命）
- ・ 学問の目的は、神の摂理と無縁な"個人の好奇心を満足させる"こと
- ・ 個別の学問構築の動き 百科全書派
- ・ ドイツに見られた近代大学の理念は、Bildung（知識により堅固に形成された自己のこと 往々「教養主義」と訳される）にあった

⑦ 19世紀の科学と技術

- * 村上陽一郎によると、科学は“19世紀にヨ - ロッパで生まれた”学問の中で最も進んだ高度な認識の形態である
- * 19世紀に誕生した科学は、工業技術とは全く関係のない状態だった
 - ・ フランスの大学では実践的な色彩
近代国家の建設に必要なエリートの養成
市民革命の結果、国家技術を保持してきた宮廷官僚が居なくなった
エコール・ポリテクニク 民生技術と軍事技術
 - ・ ドイツでもTechnische Hochschule
 - ・ 米国では州立大学 Ivy leagueとは別の位置付け
 - ・ 日本の東京大学（1877年設立）の特殊な先駆的な性格
神学部は無し
別に工部大学校 1886年に東京帝国大学工学部

F 科学に関連した疑問

- * 疑問1 “世界に不変的な一般法則がある” とするのは正しいのか

この命題の正しさは証明されていない

自然法則は確率的に出現する関係の表現にしか過ぎない、のかも

関連 量子力学の基礎原理である不確定性原理：

電子の位置と運動量などの二つ以上の物理量を同時に測定の際には不確定性は避けられない <ハイゼンベルグ>

- * 疑問2 “歴史的な現象に一般法則はある” のか

関連：「歴史は繰り返さず、ただ人これを繰り返す」

関連：人間の主観性に係わるあいまいさ (Fuzzy) ファジー工学

G 学問としての科学の発展・分化

- * 科学は、その発展の過程で新たに固有の「研究の対象」、「研究の目的」、「考察・分析の手法」を設定した新しい研究分野が開拓される
このことによって、人類の共通の資産としての知見が整理、蓄積される

- * 対象の拡大と科学の発展・分化の方向

イ 理論的研究から技術目的の研究領域へ

工学、医学、農学

ロ 基礎科学から複雑系（多様な要素が互に原因と結果の関係を生み出している）の事象を研究する総合科学へ

学際的な研究が必要

宇宙 地球 海洋 森林 などの研究

ハ 自然界から人間集団の行動と組織、文化にも拡大（既にB項～C項で述べた）

H 科学としての学術論文

- * 世の中には学術論文以外に、啓蒙／提言／政治的主張／警告を目的とした、様々な性格の論文がある

- * 学術論文は、全人類の共通資産としての科学的知識・研究成果に付加される報告である
- * 研究の対象、研究の目的、考察・分析の手法と利用した素材、参考文献が明示されていないといけない
- * 特定の対象についての研究が、同一の研究成果、資料考察の素材に対し同じ目的と観察と分析の手法（Disciplineと呼ばれている）が適用される限り、そこから得られた結論は、誰がやっても同じであることが期待されている
- * 発表に際しては関連した研究の専門家集団による審査と承認が求められる

3 社会科学系の学問の特色

I 社会科学の対象

- * 自然科学の考察の対象は自然界（自然の一部としての人間も対象になる）その後、考察の対象を様々の人間集団・社会に見られる現象にまで広げた社会科学系の諸学問が誕生した
- * しかし、そこで対象となる人間集団が歴史的な存在であることから、社会科学系の学問の原則（Discipline）は、自然科学のそれとは若干の点で異なる

J 自然科学との相違点

- ① 社会科学系の諸学問の対象であるが人間集団とその行動（社会現象）を構成する人間の持っている特性： 価値感情をもって行動する 社会を形成し歴史を作る 各地域に多様な文化、伝統、制度が生まれる
- ② 自然科学では実証的であることが重要であるが、社会科学系の諸学問が取り扱う歴史現象は再現不能 理論の正しさを実証する実験が不能

K 社会科学系の諸学問のあり方に三つの姿勢

- 1 社会の本質と全体の運動法則を探求するのが任務 マルクスの唯物弁証法
- 2 社会現象の実態を個別に研究するべし <マックス・ウェーバー>
特に経済を中心にした連関的な把握方法を排斥
- 3 本質とか実態ではなく外側に現れた現象を研究しよう

機能主義的、経験主義的な傾向

L マルクス主義の主張

- * 社会や社会現象を対象とする学問は「科学」でありうるのか、の問いに対して“社会には発展の法則がある”と考えたマルクス主義

[Karl Marx ,Heinrich 1818 ~ 1883]

哲学者、経済学者 19世紀の思想家
史的唯物論、科学的社会主義の提唱者

[マルクス主義]

- ・ K・マルクスの「資本論」を基とした経済学 + 唯物弁証法 “科学的”社会主義
- ・ その政治思想の中心は、プロレタリアートを革命の担い手として資本主義社会を打倒し、共産主義社会を建設することにある
- ・ 思想的な背景： フランスの社会主義思想 + ドイツの弁証法哲学 + イギリスの経済学
- * マルクス主義のイデオロギ - 化は、政治的な色彩を強く持つようになった
特に1907年のロシア革命後にマルクス主義的共産主義者が樹立したソ連（ソヴィエト社会主義共和国連邦 Soviet Russiaは略称）の単独独裁体制の専制抑圧政治の理論的な拠り所を提供した
- * ソ連が試みた国家統制経済運用の4分の3世紀にも及ぶ壮大な歴史的な実験は、その内在する経済システムとしての非合理性、人々の労働意欲と企業努力の消滅、官僚統制の非効率性ゆえに失敗し、その結果、他民族支配の体制である連邦制度は崩壊し、経済と国土の荒廃が残される惨めな終焉を迎えた

[イデオロギ -]

定義1： 階級・集団・組織などが自らの政治的な立場の正しさを擁護するために作り出した信条や価値概念体系
下記の定義2に対する批判として生まれた

定義2： マルクス主義者の言い出した、その歴史観、社会論理の中心概念

- ・ 政治制度、法律体系、家族制度、道徳、哲学、芸術などの社会の経済的基礎構造（下部構造）に対して、
 - a 上部構造とも云うべき、精神文化の諸形態 さらに、

b この上部構造を思想的・論理的に表現する信念の体系

- ・ “階級社会における支配階級の思想は、それ自体がイデオロギ-でこれに対して被支配階級のプロレタリアートの科学的な認識こそが正しい歴史的な認識である”とされていた

M マックス・ウェーバーの方法論

- * マックス・ウェーバーは、“社会科学が科学であるためには、特に考察において、Sein（存在、事実）をSollen（価値、理念、あるべき姿、政策）から切り離して峻別することが重要である”と主張した

[Weber, Max] 1864 ~ 1920 エルフルト生まれ ベルリン大学教授

ハイデルベルグ大学教授 ミュンヘン大学教授

経済史、社会学、経済学、法律学、政治学、宗教学で活躍し、社会科学の方法論的な基礎提供に貢献したドイツの偉大な学者

ドイツ歴史学派の指導的な後継者

当時のドイツ支配層や軍人・知識人の前近代的な性格を批判し、社会科学における概念・法則の使い方を理論づけた 方法論争

（学問上の功績）

- イ 学問と政策の区別
- ロ 合理主義を中心にした現代西欧文明に対する、世界史的観点からの、深刻な自己反省
- ハ 近代的、合理的な官僚制の理論の構築
- ニ 資本主義が特定地域でしか生まれなかった原因の解明

（主著作）「経済と社会」、「職業としての学問」、「職業としての政治」
「プロテスタンティズムの論理と資本主義の精神」

N ドイツ歴史学派の特色

（歴史学派）

- ・ 1840年代にドイツで生まれ、この世紀の後半にかけて盛んになった経済学の思潮それは、ロマン主義的な思想傾向を持ち、英国で起こった古典派経済学への批判を行った
 - ・ 古典派経済とも、またそれを批判する社会主義とも異なり、独自の理論体系を持つには至らなかった
- * 世界の各地の固有の文化・価値観の尊重し、歴史現象の普遍性を否定した学問姿勢
欧米文化への反省とアングロ・サクソン流の世界観への批判

* 19世紀以来の西欧文明の正義・合理性の信念への信頼への疑問につながる

- ① 科学への全面的な信頼 科学で自然をコントロール・支配できる
- ② 文明の進歩 豊かさ、便利さ、快適さの追求が幸福につながる
- ③ 人類活動・経済の発展 無限に可能

* ドイツの歴史学派のロマン主義的な思想傾向

	理性主義	ロマン主義
思想傾向	普遍主義 理性主義（合理主義 自然法） 自然主義（文芸の風潮では遺伝と環境）	時・空間の個性を重視する 反理性主義 反自然主義・歴史主義
歴史観	歴史の直線的な進歩を信ずる 静態的な傾向 啓蒙主義（新しい時代の精神の重視） 国際社会重視・国際主義	時代の独自性に着目する 動態的な傾向 伝統尊重 民族重視・地域主義
経済学	古典派経済学 個人主義的	国民経済を重視 国家主義的な主張 脱イデオロギー

4 社会集団の研究に際して重要なこと

○ 社会科学の特殊な事情

- * 社会科学系の諸学問のみならず、文化や価値にかかわる人文系の諸学問は、科学とは全く異なる方法と性格を持っている
- * 人間集団（社会）に起きる出来事は高度の複雑系の事態であり再現不能、従って実験で理論の正しさを検証できない 客観性が主張できない
- * 科学的な思考・認識にあたっては、Sein（現実）とSollen（あるべき姿、理念）とを峻別すること
価値に絶対的なものはない
特に集団の文化・生活様式にかかわるもの

P 現実と理論・個と集団との関係

- * 理論は、現実をモデル化・単純化して取り扱うものである
鋭い説得力のある論理は、より単純な構造をもっているが、その反面、具体的な現実との落差が大きい
- * 外界のメカニズムはシステムとして理解することが重要
システム： 全体として一つの機能を持つように作られたものの総体
- * 個別の合理性と全体の合理性の対立・矛盾
部分的に正しい認識、判断もシステムとして見たときには誤認であったり、非合理的な結論であることが多い
- * 個人と集団との関係

国家の意思 = 権力 / 政府の意思 国民の意向・希望
指導者の合理的な判断 集愚政治

Q 情報の基本的な性格

- * 情報は本質的に観察者が作成した記録である
記録されなかった部分がある
記録に際しての記録者の選択が働く
- * 情報は、その伝達過程でさらに編集加工される
- * 無意識のうちにあるいは意識的に情報の内容に偏りが生まれる
情報汚染 情報操作 心理戦謀略の危険
- * 情報への付き合い方の要点
 - ① 多ければよいのではない 検索や判断が困難になる
 - ② 質と鮮度が問題 汚染・偏りは避けられないと思え
 - ③ 検索 Retrieval 必要な時に必要なものを見つけ出すこと
入手方法を日頃から見つけておく
効率的に短時間で目的に応じた要点を狙う クイック・アクセス
- * 報道や解説などのいわゆる「情勢論」の限界
情勢論：現在、世の中に起きている事態に関して概ね入手できている報道や情報を整理ないし寄せ集めての経緯や背景事情の解説

